

中西新太郎著『若者保守化のリアル — 「普通がいい」というラディカルな夢』
花伝社 (2019年)

若年層で自民党支持が多い。その理由や背景を解説する記事や論考は少なくない。国政選挙の度に労働組合が実施する組合員投票行動調査に携わることもあり、若者の政治意識・行動への関心から、それらに目を通すことも多い。若年層が自民党を支持するのはなぜなのか、ほんとうに若者は「保守化」しているのだろうか、などを考え続けている。

本書は、著者が様々な媒体に発表した若者に関する論考に、書き下ろしを加えて1冊にまとめたものである。タイトルに惹かれて手に取ったものの、若者と政治の関わりを正面から取り上げているのは第4章のみで、最初は拍子抜けした。しかし、読み進むうちに、世論調査や投票行動にあらわれる若者像の背後には社会経済の構造変化と、それに随伴して進む若年層の生活と意識の変化があることに目を向けさせられ、考えさせられる点が多々あった。

1990年代後半にはじまる「構造改革」時代が社会のあり方を根底から変えてしまった、というのが著者の基本的な視点である。新自由主義的な社会改造とそれに並行して進んだ心性の変質が、のちに無縁社会、格差社会、などと呼ばれるようになる現代日本の現実を形作っていった。その影響をより強く受けたのが若年層であった。

第3章（「日本の青年期 — 状況は根本的に変化した」）の副題が示すように、そうした変化への理解なしには、若者が生きる現在を理解することはできない、と著者は考える。格差、貧困と、それらが生み出す「孤立」は、子どもから大人への移行期を生きる若者に、社会化の機能不全を伴ってさまざまな困難をもたらす。生存権が脅かされるような状況で生きざるを得ない若者は決して少数ではないが、それが大規模な異議申し立てにつながることは稀だ。「普通がいい」とは、若者の「夢」を問う大人の前提とはかけ離れた現実を生きる彼らの実感——ともすれば社会から振り落とされ置き去りにされてしまいかねない状況のもとで、最低限の環境・保障が不可欠だという——の表現であろう。それを著者は「ラディカルな保守主義」と呼ぶ。ギリギリの現状をせめて保ちたいという気持ちが、自民党への投票行動につながっている。

「第4章 若者たちは右傾化したか」で、著者は窮乏化モデル（グローバル化により窮乏化した層が排外主義・レイシズムに吸引される）では若者の右傾化現象を説明できないと言う。右翼的主張に共感するのは若年層に限らないし、経済的困窮層が多いというわけでもないからである。ここで問題となるのは、政治からの排除が社会化過程に組み込まれた日本の若年層が、一部とはいえ、急進化する右派言説を受容するようになる回路の如何である。

若者が取り結ぶ関係（「うちのシャカイ圏」）における関係形成のメカニズムを、著者は「共感動員」と呼ぶ。政治的動員の形態ともとらえられる共感動員は、ネット社会における擬似的な「公共圏」においても有効に作用する。「生きづらさ」を抱える若者が、民主主義秩序やその構成要素（人権、リベラリズム、「左派」マスコミ、等）を支配装置とみなして反感を抱き、ネット上の疑似公共圏に包摂されていくのは理解できなくもない。

政治的無関心という常識的な若者像に著者は繰り返し疑問を投げかける。そして、彼らの「政治的身体」（現今の秩序のもとで付与される政治的位置づけ）を認知／承認し、それが発する「声」を聴きとることを通じて、若者がおかれている政治的閉塞を打ち破り、オルタナティブな政治化の回路を拓くことを展望する。「普通がいい」という“夢”のない言葉から、若者が生きる今を探り出そうとする著者の仕事は、まさに若者の政治的身体が発する声への接近であり、応答の実践だといえよう。（湯浅 論）